

阪神・淡路大震災の教訓：言語聴覚士の役割と課題

福田 登美子（元広島県立保健福祉大学教員）

I. 阪神・淡路大震災の際のボランティア活動に参加した言語聴覚士が支援活動の現場で学び今後の課題と考えたことについて

（ボランティア活動参加 ST 群 18 名：）

専門技能の習熟、被災者の心理、支援者（ST 自身）の心理、介助技術、地域の行政との連携の仕方などの重要性、必要性を学んだ。

支援活動の現場では、咄嗟に活かせる目に見える技能、相手の気持ちを読みとる、気持ちを聞き出す技能や知恵が求められること、個人の専門力の不足を専門職間や関連職種の力の集結で補う重要性、日常的に職場内のみの行動でなく地域行政との関わりにも目を向ける必要性などがある。

専門技能に関する具体的内容：

- 1) 自分の専門外の内容についても基本的な知識と技術を身につけて置く：例えば失語症を専門にしている者は補聴器の扱いが分からない、難聴を専門にしている者は失語症者への情報伝達法が分からないでは困る。最低限のことは知っておく。
- 2) 障害のある人の支援は、本人のみでなく、避難所で周囲にいる人々や行政などへの情報伝達を含む広範なものとなる。具体的にはパニックになっている障害児者への話しかけ方、接し方に配慮したり、避難所にいる人に障害のある当事者を理解してもらえよう説明したりすることが必要であり、そのための方法等は基本的技能として習得しておく。周囲の人たちからの情報を通して支援から漏れている人や地域を見つけ出す能力と行動力、迅速かつ正確に行政に情報を伝達する方法など多様な技能の習得が求められる。
- 3) 実際の支援活動では、補聴器の調達や調整、高齢のコミュニケーション障害者（主に聴覚障害者）への情報支援や移動の介助等がもっとも多かった。

Ⅱ. 被災者からの聞き取り調査（神戸市長田区在住の14名の方）

被災状況：自宅全焼3名、自宅全壊11名。

年齢：50歳代～90歳で、半数は60～70歳代。

被災時の家族構成は、独居者11名、家族と同居3名。

ボランティア支援（一般的ボランティア）を受けた人は9名、

受けなかった人5名（避難所へ誰も来てくれなかった）

被災者のことば（抜粋）：

- ・ 視覚障害者が避難所まで連れてこられて放置され、不安で騒ぎ出し皆に叱られておられたのは気の毒だった。
- ・ 人の気持ちを察して話しかけたり、行動して欲しい。
- ・ 励まそうとされる歌声も苦痛に感じた。
- ・ 支援者は組織で動かずに、自分の足で歩いて誰への支援が必要かを見つけて欲しい。情報が欲しい。
- ・ 被災者からみると、支援者も行政も平等ではなかった。支援物資の配布先にも不平等があった。物が山積する所と、何も届かない所があった。
- ・ 支援者もお祭り騒ぎの様に集まる場所と、誰も来ないところがあった。
- ・ 被災者にもボランティアの人にも自殺者が出た。
- ・ 被災者は支援を感謝しつつも異様な心理状態（人の話しかけや動きがわずらわしく思える、自分が忘れられている）や不平等感（自分に配られた毛布は質が悪い）におそわれていた。